

高山部報

NO. 1

地蔵嶽

目次	
部報発行のよろこび	一
今年の記録	二
記念祭を終って	五
記赤城隨想	六
雑早川尾根小屋の 想出	七
丹沢表尾縦走記	八
名簿	二
カット	ササノユキオ

〔参加者〕 宇藤(○B) 木村(三C) 南波(三D) 高橋(二B) 神島(三D) 母野(三H) 横川(三H)

◎尾瀬沼より日光之(八日行程)

夕イム 七月十九日 沼田発(三三三) バス 大清水(八〇〇) 八三〇

〇(一) 三平峠(二〇〇) ー 長藏小屋(三三〇) ー 沼尻平(三三〇) ー 「キャンプ」

〇七月二十日 沼尻平発(八〇〇) ー マナイタケラ(二二〇) ー 三三〇 ー 紫雲堂(三三〇) ー 温泉小屋(二八〇) ー 「泊」

〇七月二十一日 温泉小屋発(九〇〇) ー 三條龍(九四〇) ー 〇(一) ー 温泉小屋(一〇五〇) ー キャンプ場(弥四郎小屋(三三三)) ー 「泊」

〇七月二十二日 尾瀬ヶ原一周

〇七月二十三日 キャンプ場発(八三〇) ー 沼尻平(二二三) ー 「キャンプ」

〇七月二十四日 沼尻平発(六〇〇) ー 長藏小屋(六四〇) ー 小瀬田代(七三三) ー 高石山(八〇〇) ー 赤守山(九〇〇) ー 黒岩山(一〇〇五) ー 水場(一〇四五) ー 鬼怒沼(一三〇七) ー 「泊」

〇七月二十五日 八丁湯発(九三〇) ー 根名草山(二三〇) ー 水場(三三四) ー 一四五〇 ー 温泉平(温泉岳登山口)(一五五〇) ー 金精峠(三五〇) ー 一六〇〇 ー 湯本(二七二六) ー ヤマノ浜差(三〇〇〇) ー 「キャンプ」

〇七月二十六日 ヤマノ浜差(二二三) ー 中宮祠(二二三) ー

華嚴龍(二二五〇) ー バス発(二三四) ー 明智平着(三三〇) ー ケーブル発(四〇〇) ー バス 日光着(四三五) ー 日光駅発(二六四〇)

〔参加者〕 和田(三B) 山口(三C) 外二名

〔備考〕 温泉小屋宿泊料 一八〇〇円

バス料金 沼田 ー 大清水 二〇〇〇円(荷物代を含む)

華嚴庵 ー 日光 五四円

◎第二十一回例会

丹沢表尾根 (日帰り) 十月二日(晴)

〔夕イム〕 新宿駅発(六五五) ー 大森野駅(八三〇) ー 大森野発(九〇五) バス 七家毛(九三〇) ー 九四〇 ー 新ヤヒツ峠(一〇四〇) ー 一〇五五 ー 富士見橋(一二一五) ー 大平山(一二〇〇) ー 一三二五 ー 三塔(一三二五) ー 一三三〇 ー 鳥尾山(一三三五) ー 一三三〇 ー 行者ヶ岳(一三四五) ー 十三五〇 ー 新大日岳(十四二〇) ー 十四三〇 ー 木又大岩(一四三八) ー 塔ヶ岳(一五〇〇) ー 一五五〇 ー 金冷ヶ岳(一六〇五) ー 花立(一六二〇) ー 塔山(一六三〇) ー 一本松(一七〇〇) ー 大倉(五四〇) ー 湯沢駅(一八四五) ー 一九〇四 ー 新宿駅(二〇四〇)

〔参加者〕 中川(三B) 山口(三C)

神島(二D) 鈴木(二F)

高橋(二B)



個人旅行



八月三日 山中湖 (三日行程)

八月三日 八月五日

八月三日 山中湖 (三日行程)
 八月五日 山中湖 (三日行程)
 八月三日 山中湖 (三日行程)
 八月五日 山中湖 (三日行程)

八月三日 川瀬 (三日行程)

〔備考〕

・乗客部 営業場使用料

・バス 船津 (河口村) 船津) 三十円

・バス 船津 (吉田) 十五円 (他に荷物代五円)

・バス 吉田 (旭ヶ丘) 四十円 (他に荷物代二十円)

・バス 旭ヶ丘 (御殿場) 六十円 (他に荷物代三十円)

八月三日 赤城山 (四日行程)

八月三日 八月二十四日

〔備考〕

八月二十一日 上野登 (七三五) 前橋駅 (二〇八) 三三

八月二十一日 赤城山登山口 (二三三) 御幸橋 (二〇三) 箕輪 (二六〇) 一杯清水 (六五)

八月二十一日 新坂平 (二七三) 大洞 (八三五) 小鳥ヶ島 (一八四) 〔キャンプ〕

八月二十二日 小鳥ヶ島登 (二二四) 沼尻青木旅館 (二二二) 赤城神社 (三三五) 見晴台 (四〇〇) 新坂平 (五〇〇) 小鳥ヶ島 (六三五) キャンプ場 (二七三) 〔キャンプ〕

八月二十三日 キャンプ場 (二二三) 駒ヶ岳 (二二二) 黒松山頂 (二二四) 猫岩 (三三四) 小鳥ヶ島 (四〇〇) 大洞 (四二〇) 小沼 (三五) 〔キャンプ〕

八月二十四日 小沼登 (五五五) 大洞 (六三五) 新坂平 (一〇〇) 一杯清水 (二三五) 前橋駅 (三四〇) 上野駅着 (一七四) 〔備考〕

八月二十五日 前橋 赤城山登山口 三五月 御幸橋 箕輪 五〇円

八月二十三日 十日峠 (日帰り)

八月二十三日 東京駅着 (六二二) 小田原 (八二八) 強

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

八月二十三日 早雲山 (一〇二) 大瀧谷 (九四) 九五四

〔参加者〕中村(三三) 三十円
 北アルプス縦走 五十円
 〔参加者〕司馬 外二名
 記録 未提也

〔参加者〕中村(三三) 三十円
 北アルプス縦走 五十円
 〔参加者〕司馬 外二名
 記録 未提也

〔参加者〕中村(三三) 三十円
 北アルプス縦走 五十円
 〔参加者〕司馬 外二名
 記録 未提也

記念祭を終って

三三 中川浩一

皆何の御努力の甲斐があつて無事に記念祭を終つた事は関係者の一人として喜ぶことに違ひない。昨年の更に評に於ては、今年こそはと思つたもの、やはり準備不足は手ぬかりで、二期した成果は上げられなかったが、まあまあ八十は持ちこたえたと思つてゐる。塚本園治さんの写真が

多分この何となくもヒットで出来たものに關係して、
 かしこ中々というく、骨折して下さした南根、本村両名
 には、全く感謝の言はけ有り。又夜おそくまで、木立園集
 の作業に従事された皆様に対し、もう厚く御礼申し
 上げよう。しかし、今度の記念祭の結果が最上であつたか
 どうかは、まだよく考へさせられるものがある。予定し
 た本を募りたあたり、又一部の方ではあるが、甚だ枚増
 やりな感じを抱かせたものがある。これは畢竟である。
 又展覽会当日にしても、あまりに無責任ではなかつたらう
 か。誰でもいふ言ひない、会場に鐘詰にされることは、甚だ
 有難くないことであり、くだらぬことには違ひないが、
 部に入つて、以上は、ものと責任をとつて、たゞまたか
 った。念舎の晴の去席の少いこと、殊にこの部報の如き
 昨年かう問題とされ、いふのに、実況が今日となつた
 のもよい例である。もっと責任をもち、やつてほしい。
 これが今回の記念祭で痛切に感じられたことの一つ
 である。この外、今回行つたパンフレットの問題、広
 告を空内に入れられたこと、ついても問題はあつたらう
 が、今回は少し度をこした株だが、制限さえすれば、
 ば、どう自主のものではないと考へる。
 まだよく考へれば、いろいろの事がありそうだが、
 この辺で打ち切つて置くことにしよう。



雑記



赤城隨想

二日 笹野幸夫

牧歌的であり静寂と幽邃

とを秘めた山、これが赤城である。

関東平野のどこからでも望める

雄大な裾野をかくこの山頂は数峰に岐れ、黒松、地蔵

蕪鍋刺、鈴ヶ岳等の諸峰連山する中に、大沼、小沼の

明鏡が漲っている。大沼湖畔には赤城神社が鎮座す

る。し、その附近に往年の牛馬自遊する牧場が見え

る。新坂平を中心とする緩傾斜は豊かか、肥沃と

覺えさせ、到達に満足と昇へる。

水槪と振子として白樺の老大本に覆われた大沼は、

東岸に細長く突き出た小鳥ヶ島を浮べる。そして

大沼一圓一里余の水気を含んだ大樹の間の小径を散

策するのほほしく、木蔭に仰ぐ外輪山の山脈は高く

低く美しく続く。又、光あふる朝、静かに暮暮れ行く

夕べ、そして近くの水さえ見えなくも、虚無の如き濃

霧、これらけ私達が山に於いて求める絶頂ではな

らうか。就中、小波立つ大沼湖畔に迎へる赤城の

朝は美し。

湖と小舎にわれは窓近く

小鳥きて鳴く夜や明けぬらし

朝あけの湖は古鏡の色にすけ

久呂保のわらをもよ、うつせり

郭公は、しほり鳴くなり鶯は

呼びかたしなく朝のみづらみ

朝もやけ湖をこめたり、我が宿の

銀鼠色のえんじやの若芽

小鳥は啼きかほしをり眼をむれは

緑流れ入る静か朝あけ

小鳥の声に迎える朝、この美しさを詠んだ数首

の歌を並べてみた。

ゆるやかな斜面、間近かに地蔵岳の聳える斜面

センターメンタルな斜面、これが新坂平である。私がこ

こ之を歩いた時は夏であり、木々の実在する中に、松

虫草が一面に咲き乱れ、その上を蝶が舞っていた。

場面は印象的であった。そして赤城最大の憧憬

地として深く胸にしみ込み、今後とも私の山旅

日記のページをかざることだろう。

又、屈曲の少い卵形をなした小沼は長七郎を中心

とした山に囲まれ、一方にこの湖唯一の流出口粕川

を有する。細く深く刻まれたこの粕川の谷間は、

有知なお伽の森、鉾子の伽藍等幽閑なもの

の、自然美を藏し、不可思議な魅惑力を有す

る。小沼そのものは、大沼の如き変化と広大さとは

は、恵まれていないが、それだけに、小じんまりした

静謐さがある。赤城唯一の部長大洞とは十一丁の

怪鳥をへだて、訪う人もまばらに、妖声の二す怪鳥が、
湖上に響き響くのみである。

五、湖の最高峰、黒杉山は大沼の東岸にそびえ、
湖畔より登ると約一時間半、一八三・八米の頂上
から大沼は勿論、眼下には小沼、覚満湖の両沼を
めぐり、小島ヶ島、大沼の部蒸玉埴玉、遠くかすむ関

東の平野もけるかに望むことが出来る。地蔵岳は
もに生える樹々が見えよかの如く、近くに遊覧を立ち、
湖の湖畔には鈴ヶ岳が穴尻として他の山々を抑圧
する。下山の途には十数米の猫岩がそり立ち、怪

しいところかすむと思、徐登行の終、止符を打つ。
夏は、雨降りにないかと思、知れぬが、この山は雷雨が多
く、雨降りにあつて、登り、大さな太鼓を轟かして、

山頂から、雨降りにあつて、熱帯地にあるか、初心者には、
雨降りにあつて、熱帯地にあるか、初心者には、
雨降りにあつて、熱帯地にあるか、初心者には、

雨降りにあつて、熱帯地にあるか、初心者には、
雨降りにあつて、熱帯地にあるか、初心者には、
雨降りにあつて、熱帯地にあるか、初心者には、

雨降りにあつて、熱帯地にあるか、初心者には、
雨降りにあつて、熱帯地にあるか、初心者には、
雨降りにあつて、熱帯地にあるか、初心者には、

早川尾根小屋の想い出

二D 神島 一部



山に登り、一夜を明した事は、登山者にとって、その

山の想い出を深めるのに随分大きな役割を演じ、
て、愉快な一夜を過ごしたことが、或は、もうでなかった幸
でさえも、楽し、想い出となる。そんな意味で、今年の
夏の南ア、早川尾根小屋の一夜は大変楽し、想い
出となった。

その日は、アサヨ峰から一ツピークを間違えたりして、
もうやく午後の二時頃、小屋についた。出発前、倒
潰して、と聞かされたが、実物を見て驚いた。柱も
サイドもなく、ペレヤゴに潰れて、おまけに屋根も半分
位しかない。しかし、裏にまわると、床も野もあり、十人位
どうにかもぐり、ニメもようなので安心した。小屋のまわ
りには、藪や谷たる森林に囲まれていたので、正面にある

はずの北岳も見えず、眺望はなが、無意味な程、静
かで、水場も近くにあり、薪も豊富なので、山小屋と
しては、もって、この場所である。此處は、なにして、二千
四百米もあり、尾根にあるので、夜は寒か、うとうと、附近
に沢山ある、枯木を倒して、薪作りにか、つたが、中川ま
んのと、横川の山刀が、二つしかなく、たちまち、横川の

が、二つしかなく、たちまち、横川の
が、二つしかなく、たちまち、横川の
が、二つしかなく、たちまち、横川の

が、二つしかなく、たちまち、横川の
が、二つしかなく、たちまち、横川の
が、二つしかなく、たちまち、横川の

て七分の飛び切りうまいやつを作るのだから難し
 い。メリケン粉がないのでかたくり粉で代用にした
 ので黄色い半透明な餡やうあやしげなものが出
 来た。夕、暗せざる頃に、すべて用意が出来たので、
 小屋の前の草の上に皆、車座になって、晚餐とすた。
 大妻にカレライヌが好評で、朝から食欲が無し、元氣
 のなかった安藤さんも、これで食欲が出て元氣になつ
 た。食後、小屋にもぐり込み、火を囲んで、明日の計
 画など、話あつてから、夜一人づつ、当番で焚火をす
 ることにした。この小屋は、昨晚、北沢小屋で長衛さ
 んから怪談を聞かされた白くつきの所なので、たちまち
 心もほろ大妻も三とを云つて、世野、横川あたりから、
 奴が来て、二人、ついでするに、高橋と。高橋と
 僕は一番時間の悪い十三時から二時。がっかりして
 毛布にくるまる。間もなく寒さと、蚤の攻撃で、
 うとく、している中に、起きた。高橋は起きたが、
 すぐ寝てしまったので、一人火を焚きながら、戸もな
 入口から外を見ると、木間から明日の晴天を約束
 する様に星が冷たく光っている。



東京の空は、こんなに美しくない、山の空と、都舎の空
 とは、別の空だ、なごと思つて、やがて交代の時
 間が来て、身体が暖まるにつれて、天界の空想
 もどこへやう、意識が不詳明となり、死の称を
 深い眠りに落ち、行つた。



記

丹沢表尾根縦走記

三B 中川浩一

新宿を七時三十分迄の急行で
 立ち、大妻野に着くと既に先祭
 の連中が待つていた。始め少く
 とも参加十数人を予定したのに、来たを聞いたら、わす
 れずみ一匹。とにかく出かけることにして、九時祭のバスに
 乗り込む。道がおもしろく思つて、すい上下動、二十五分
 兼毛につく。部落をぬけると、道は二つに分れ、左をどつ
 て数分で橋のたもとに出て、柏木林道が始る。川に流
 して上ること、十五分程、途中大山裏参道をやけて、春
 岳エニ堤につまみたる。春岳沢をわたると道は尾根にど
 りつき、じくさく登る。途中防火線をやけて、エニ堤から二
 十分程でヤビツ峠につく。展望は、屋外悪く、分たの
 らの丹沢林道はトラウクも通る、道である。峠を
 出ると、道はずぐ谷沿いとなり、三つ分、分も先えてなが
 ながま。富士見橋から、指導標にしたがって、林道
 をはなれて、五分も先くと、又、二の塔登山口の指導標
 標があり、す、きの中を踏跡が短く、道はボサ
 の中を通るものだが、相当の急勾配で、時々ガレの横
 を通る。ガレには、恐ろしく大きなオニアサミが咲いて
 いるが、どどつてすべる、ま、すいので、けんした。昔
 しに、一時間、ヤツと二の塔に着く。この時下で十

二時のサイレンが鳴るのが聞えた。三の塔迄はあと十五分とのことなので勇気をふるり起して三の塔にのぼる。

三角卓狂の自分分は真先に三角卓を掃した。が、ついに見つからず後味が悪い。例に依つて倒れ如く紅茶をわかし、置飯を食べる。三の塔から鳥尾山へは、相当の下りで、よ

か上岩が三つくし、すこぶるあぶない。無鉄砲の下君と君、傾斜にほど全然おさまらず、下りたければ必ず

かげり、あやうく谷へころがりそうになるが、早いことは、確かに早い。途中で堪へ無からの縁走者に念って、また

四時間かかると驚かされたが、たししたことはないと、あいかわらず、ゆうくと歩く。行者も岳は一寸した赤岩で、

命知らずのゆうと云う像が、一つか二つ、ころがっているが、こちらには方にも面白くなく、たゞ凸凹の上を忠実に上下

する道がうらめしい。新大目迄来るともう堪へ岳は、腰筋にせまり、指標はあと四十分と書いてある。右から

水無川をいびつて来た道を念し、なんと云うことなく堪へ無にのり、本に云う最後の急峻とは、二人ふもめかとは

何だかもうしめげかする。と、ころがせ、かくついた堪へ無、又恐ろしく感じの悪いところだ。あたには、まるで、

ヤワを一着に及ぶ、ハイルが既に知らず、ハイルをリボンにしたソフト等々、の天晴神をかりて、ほうほうく

無人、あたりを、じ歩けてみる。しかし、頂上の展望は仲

仲すけ、つしく、松洞丸、丹沢山、岩にまき見える。丹沢山、

頂上に約三十分程で下山する。登りのかたつむりの

歩みにくうべて、伝統的下りの想、スエードは、こども

も発揮されて、ほとんど歩かす、句読点を利用して、か

下りる。一緒に頂上を去る人も、大倉で二十分は、た

したはずだから、相当なものである。馬鹿鹿尾根の下

りは、実に長く、先の時刻も、なるので、たけ飛出す

速急	六・〇五	小田急	八・五五
急行	六・五五	東武	八・五五
特急	七・三〇	山手線	九・一〇
急行	七・四〇	丸の内線	九・一〇
特急	八・一〇	丸の内線	九・三〇
急行	八・一五	丸の内線	九・三〇
特急	八・四〇	丸の内線	九・四〇

次は小田急の朝だけの時刻表をのべておく

(備) (1)は大倉駅及び新大倉駅での特急列車

部員名簿

学年組	氏名	電話	住所
3A	佐藤 仁朗		北多摩郡狹尾村岩戸1412
3A	水垣 康夫		渋谷区代々木西原町923
3B	中川 浩一	中野(38) 1711	中野区桃園町19
3B	中村 秀雄	松沢 2681	世田谷区松原町1,51
3B	和田 哲哉		大田区堤方町727
3C	木村 紘	大崎(49) 1009	目黒区下目黒4,945
3C	山口 洋一		杉並区荻窪1,12
3D	市川 淨一		目黒区中目黒9,310
3D	川瀬 良一		武蔵野市吉祥寺814
3D	南波 貞敏	松沢 3150	世田谷区松原町2,730
3D	林 春彦	松沢 4032	世田谷区永福町255
3E	高橋 武伸		中央区銀座3,10
3F	佐藤 保		中野区新山通2,35
2B	高橋 洋文		杉並区成宗1,53
2D	神島 一郎	荻窪(39) 2043	杉並区西荻窪1,20
2D	司馬 正次		北多摩郡国分寺羊兵衛新田
2F	平沢 桂朗		杉並区上荻窪1,41
2H	平筈 野幸夫		杉並区大宮前4,471
2H	横川 勇	荻窪(39) 2517	杉並区阿佐ヶ谷3,478
1F	尾崎 行利		杉並区成宗1,95
1F	平沢 一郎		杉並区上荻窪1,41
1G ₂	佐藤 信治		八王子市本郷町20

都立十高山岳部誌

——非売品——

1001

昭和二十四年十月三十日印刷
昭和二十四年十二月二十四日発行

責任者 中川浩一

編集者 菅野幸夫

発行所

東京都都立十高山岳部

十高山岳部

東京都杉並区大宮前町四六一

電話 荻窪(39) 三二八六

どんな生活の中からも
生活のうらみをおいに見出す
努力をすべきだ。生活文
化とは必らずしも金銭
冷蔵庫と共にばかりあま
りではない。現実には許
されず部員で極力部
活動と成りたしたい。

(YS)